

武家名目抄稿

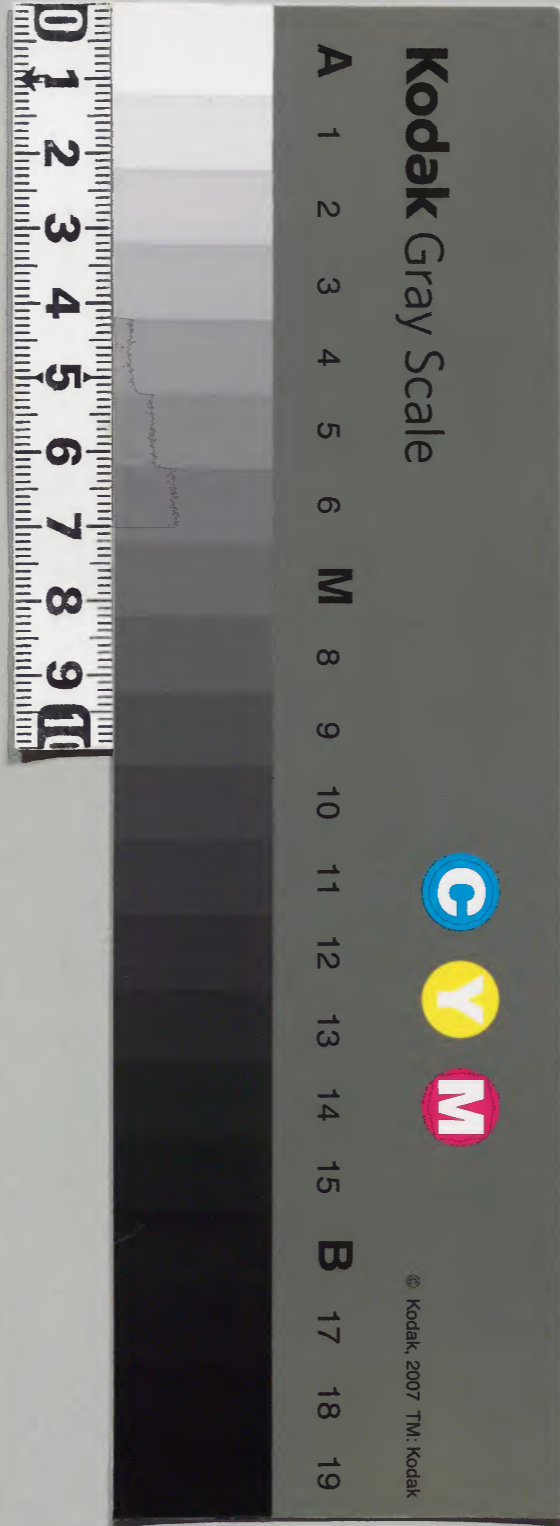
梅呼部

十

和書門	
二五二〇六	類
七七六	號
七七	函
四五六	架
四四九	冊

和書	
二五二〇六	類
四〇六	號
四〇五	冊
四〇四	架

内閣文庫	
番號	和 25206
冊數	457 (105)
函號	153 275





武家名目抄稿第十冊

稱呼部七中目錄

一族

一族名字

一門

一黨

一類

一味



洞

氏族

家族

家門

門客

武家名目抄稿第十冊

源平兩方中目録

武家名目抄稿第十冊

稱呼部七中

一族

^{三百六十九、四十六才} 貞治三年地云案上子北く上貞治と稱せ

漢守春將軍法京云則う孫荒川太郎政貞子

貞治の富育乃奪ふ子北の治より起りて孫

郎從をちてこし秀武ふりきううせと名く

升て合戦をいなり貞余殃虐よなして治の江守

家郷をせめても一軍とて侍らざる
士名を何くも幾ひも此の世と志す

吾妻鏡云治承四年五月廿六日丁丑卯討

宮令赴南都御三升寺無勢之間依令侍奈

良御也三位入道一族并寺衆徒等候御供

云々

又云治承四年八月六日丙戌召知道昌長

等於御前有卜筮又以來十七日寅卯討點

可被誅兼隆之日時訖其後工藤介茂光上

肥次郎實平岡崎四郎義實字佐美三郎助

茂天野藤内遠景佐々木三郎盛綱加藤次

景廣以下當時經廻士之内以殊重御旨輕

身命之勇士等各一人次第召拔關所令議

合戰間事給雖未口外偏依恃汝被仰合之

由每人被場慙御詞之間皆喜一身拔群

之御芳志面々欲勵勇敢是於人雖被禁獨

る此四郎曰は申すにせしむる事ハ其ノ事ナリ
めしし事ハ其ノ事ナリ
此れハ其ノ事ナリ
田北も地ともいふ事ハ其ノ事ナリ
せしむる事ハ其ノ事ナリ
井の四郎太郎ハ其ノ事ナリ
うに其用事ハ其ノ事ナリ
こと地も其ノ事ナリ

あふことし其れハ其ノ事ナリ
このちうし其れハ其ノ事ナリ
ましあひちうし其れハ其ノ事ナリ
梅松藩云々其ノ事ナリ
行はまこと其れハ其ノ事ナリ
職ハ其ノ事ナリ
御下又ハ其れハ其ノ事ナリ
め治ハ其ノ事ナリ

伯耆之卷之四田入道と云く被作下々也
之の立り事あり此地著品の中上位と可
有次第と勅定あり也又此
をとりて集り以六條の將殿を油を執り
名中神作下也少く限者うて難叶は但
白春櫻ちち在地以上村上又中長高と
中ちちちち馬馬も取りて禁噲張良も者
うりやと思はる供具上家富一族も多くと扱

乃ちちちといは是を可有古物といは近國より自

是外には候事と申て御所を我々の

太平記云 陶山小見 備中國ノ住人陶山藤

三義高小見山次郎某六波羅ノ催促ニ隨

テ望置ノ城寄宇ニ加テ河向ニ陣ヲ取テ

居タリケルカ東國ノ大勢既ニ近江ニ着

ヌト聞ヘケレハ一族若黨共ヲ集テ申ケ

ルハイサヤ殿原今夜ノ雨風ノ紛シニ城

中へ忍入テ一夜討シテ天下ノ人々目ヲ
覺サセシト云ケレハ五十餘人ノ一族若
黨最可然トソ同シケル

又云 害條 桜山 自望置城モ落サセ給ヒ棉モ自

害シタリト聞ヘケレハ一旦ノ付勢ハ皆

落失又今ハ身ヲ不離一族年来ノ若黨二

二十餘ソ残ケル人牛ニ懸リテ尸ヲ曝サ

ンヨリハトテ當國ノ一宮へ参リ八歳ニ

成ケル最愛ノ子ト二十七ニ成ケル年来

ノ女房トヲ刺殺テ社壇ニ火ヲカケ已カ

身モ腹搔切テ一族若黨二十三人皆灰燼

ト成テ失ニケリ

又云 五六 越後守仲時 糟谷三郎越後守ニ向テ

申ケルハ予矢取ノ可死處ニテ死セラレ

ハ耻ヲ見ト申シ習ハシタルハ理ニテ候

ケリ 略 敵此一所計ニテ候ハ、身命ヲ捨

テ打掃テモ可通候力推量仕ルニ先土岐
力一族最初ヨリ謀叛ノ張本ニテ候シカ
折ヲ得テ美濃國ヲハ通ケシトソ仕候ハ
ニスラシ吉良ノ一族モ度々ノ召ニ不應
ノ遠江國ニ賊郭構テ候ト風聞候シカハ
出合又事ハ候ハシ云々

又云新田義貞 新田太郎義貞去三月十一
日先朝ヨリ綸旨ヲ給タリシカハ千劔破

ヨリ虚病ノ本國へ歸リ便宜ノ一族達ヲ

潜テ集テ謀叛ノ計略ヲ被回ケル

難太平記云満々として天下を治むるに及ばず

日赤國の人降るといふ恩地をあたふ人首を

一族達とてし殊更今ハ備多しと物事あり

大塔軍記云今日出立見物頼阿ヲ以テ為

規模具續テ中川三郎飯田左馬之助入道

略中具外一族外換人ニ都合二百余騎云々

園太誓云文和元年三月四日基經卿升文
覺誓法印状送之書寫讀之先日乍物忘參
并恐悅候抑去月十八日關東凶徒等没落
武州狩野川之城官軍兼勝攻懸大王以上
州信州之堺白居塔下まじ己出御歎諸方
大軍如雲霞可變雌雄之條不可迴踵之間
新田者共注進昨日酉到來則申八幡了先
度自大王被仰下之趣悉以符合不參恙之

條返々日出畏入候外無他候新田一族以
下諸將十五日立上州對治國中與黨殘黨
打越武州及關東突向之間尊氏以下不堪
防禁逃落候云々
後愚昧記云貞治二年九月九日乙亥傳聞
此間自關東飛脚到來兵衛督基氏朝臣與宇津
宮一族等合戰西方各十万余人討死了宇
津宮引退菴城了云々

又云永知三年九月一日傳聞去月十二日
鎮西合戰南方宮自殺菊地被_二打_一取了仍鎮
西當方恙一統之由一昨日飛脚到來云々
是大内介子息所成功也云々後聞_{大内代}
說鎮西官者非大將宮植田宮_{ワサタ}故宮僧并菊
地一族以下魁師_帥百人許討取云々
花營三代記云應安四年十一月九日曉河
州字利和和城寄于南方勢引退云々陽淺

一族為宗凶徒百餘人被討云々
又_中云康曆二年五月十六日小山下野守義
政與_{宇都宮}下野前司基綱合戰宇津宮討
死之由有其聞之義政方一族大内入道又
子親賴三十餘人幸嶋惣領志_キ荒嫡子泰内
次郎以下二百餘人云々
明德記云明德二年_辛歲山名陸奥守氏清
同播磨守滿幸以下一類恙同心ノ隱謀ノ

企了儿。仍テ不慮之。兵乱出来テ都鄙暫ク不穩。其盤腹ヲ尋ニ一族。山名宮内少輔時熱同古馬頭故トソ聞エト略下。嘉吉正五才記云赤松大膳大夫滿祐一族ノ耻辱コレニスキスト諸大名ヲ誥ラヒ訴訟被申ケル

建内記云嘉吉元年六月廿三日戌子傳聞吉良東条御一族也号逐電云々先度自関

東以廸文相催其内款云々
康畠七記云文安元年七月十日丁後聞美濃守護代戸嶋去月十九日於土岐屋形被誅之其一族從類等卒近江勢今日打入美濃燒拂垂氷討取守護方勢三十六人云々
應仁正十才記云公方勢打立ト聞ハ武衛ノ屋形へ馳入ヘシト有シカハ山名ノ一族并土岐一色六角方モヒヒキ騷キ天下忿劇

限ナシ

應仁^{三十七八はセウ}別記云吾朝御堅入洛ニテテハ赦

免子細アルマニト綸命也此夏石見悦テ

赤松一族ニ間嶋ト被官中村太郎四郎ヲ

加ヘテ申合ケレハ同志ノ者トモ十餘人

申談南帝奉ヲソ望申ケル

石川^{ハニオ}氏又書云先日^{ハニオ}成御内書りるん生子

細令啓其處具示^{ハニオ}陸の大志^{ハニオ}以仍る言は意

帝ニ由承^{ハニオ}公松^{ハニオ}目^{ハニオ}か^{ハニオ}他^{ハニオ}る^{ハニオ}言^{ハニオ}フ^{ハニオ}後^{ハニオ}同^{ハニオ}言^{ハニオ}

忠^{ハニオ}弟^{ハニオ}ら^{ハニオ}う^{ハニオ}子^{ハニオ}可^{ハニオ}然^{ハニオ}此^{ハニオ}後^{ハニオ}性^{ハニオ}柳^{ハニオ}井^{ハニオ}子^{ハニオ}可^{ハニオ}中^{ハニオ}

ハ^{ハニオ}急^{ハニオ}ク^{ハニオ}降^{ハニオ}之^{ハニオ}七^{ハニオ}月^{ハニオ}十^{ハニオ}日^{ハニオ}降^{ハニオ}上^{ハニオ}石^{ハニオ}川^{ハニオ}中^{ハニオ}務^{ハニオ}冬^{ハニオ}輔^{ハニオ}

氏^{ハニオ}朝^{ハニオ}

今川大奴^{ハニオ}城^{ハニオ}之^{ハニオ}意^{ハニオ}持^{ハニオ}て^{ハニオ}第^{ハニオ}年^{ハニオ}一^{ハニオ}言^{ハニオ}上^{ハニオ}日^{ハニオ}筆^{ハニオ}

此^{ハニオ}ら^{ハニオ}々^{ハニオ}あ^{ハニオ}ら^{ハニオ}う^{ハニオ}も^{ハニオ}七^{ハニオ}日^{ハニオ}中^{ハニオ}一^{ハニオ}言^{ハニオ}て^{ハニオ}ら^{ハニオ}る^{ハニオ}

場^{ハニオ}々^{ハニオ}一^{ハニオ}客^{ハニオ}人^{ハニオ}常^{ハニオ}殿^{ハニオ}地^{ハニオ}方^{ハニオ}々^{ハニオ}あ^{ハニオ}ら^{ハニオ}る^{ハニオ}客^{ハニオ}人^{ハニオ}

此^{ハニオ}ら^{ハニオ}は^{ハニオ}一^{ハニオ}言^{ハニオ}て^{ハニオ}ゆ^{ハニオ}り^{ハニオ}也^{ハニオ}弱^{ハニオ}敵^{ハニオ}上^{ハニオ}の^{ハニオ}意^{ハニオ}を^{ハニオ}は^{ハニオ}性^{ハニオ}て

も其人の位キよりて之人の一家に族家子持
て也

又云随兵付上手下子乃馬打等中武家の
家と申して手川のし上層ある人も
有あり其五代キもあてきりてさうり
上人位を大付の位も定まるあり武家天下
を拂給て後世一族の位同
よりてとこそな位はさうも不同あり先代

の世の城入道、同付の位をとりし
大吏よりし一族よりし下流付よりし
望もきき南佐代よりし土岐伯を
りハ上一族よりし下と定りし
佐後判友入道も如形家作あり是は
人の一代よりし北平とこそ

今川了俊書札に云徳家キが事後
一族よりし上人の位よりし徳家キの

は家人と申はあつても家上定ては徳を又世家
と申は公家より郡勅修も四條ある中入る
又久我あつても申はあつても家上定ては徳を又世家
可中我家より郡勅修の人も長井の人も
一徳ありは是徳を又世家とて徳を又世家
あつても申はあつても徳を又世家とて徳を又世家
同様に定定の仕度又後徳を又世家とて徳を又世家
に申はあつても申はあつても徳を又世家とて徳を又世家

徳より二口徳とて徳を又世家とて徳を又世家
又云將軍家の位一徳ありて徳を又世家とて徳を又世家
すも徳を又世家とて徳を又世家とて徳を又世家
に申はあつても申はあつても徳を又世家とて徳を又世家
とて徳を又世家とて徳を又世家とて徳を又世家
也毎る毎徳ありて徳を又世家とて徳を又世家
は上徳ありて徳を又世家とて徳を又世家とて徳を又世家
中申はあつても申はあつても徳を又世家とて徳を又世家

りて從下の子位より從上の子位に昇る位名
より一族の位より一に位も同位より四位
の人をよむ書礼の同位を南に忍座講を
よむらきと

思耳回穂池之南郡大領大領大仙崎大仙崎城志

城主南郡大領志信切孫一強比とてし

けり

叔井日記云上氷上御本國之ハ宗徒ノ御
先祖條

一族衆老臣衆ヲ御残し元就公ノ旗下分
トシテ預ケラレ

豊トナリ隆之別所より南のむ所の一強郎等二百名
軍人合と共の事ハ概中論ありとて今も

軍よりよき抑りありて流るる事ハしるす
うよのいふ事一とて

智チ安西遠記之南中野より北の地畠の一族
三古将らより多氣郡田丸師部高郡大

河内市北同郡坂内市也

天正記云坂田一族有ける猪野日精子太郎

同右る也勝定を信じてしよる人等一とくを

二とく首をさうしつた也

音九十五四ノ阿部将裔記云義隆を助北男天正二年九月

二日本島より生ふ母二周防國土内介一族

柳原を信也也

四十七ノ大岡記云良助右衛門とて東海に城を築きし也

一とて信一とて先祖の面とあり一とて運小

りよひるるも村のひと等もあつた也

一とて吉田といふは助吉といふ同族子也

一とて又十郎一とて徳和堂北極を創りて

五月七日入部め控武いとゆふええん

とて

大友記云龍造寺山城肥前國龍造寺山城

守隆信屋形ヲソムキ大身ナレハ他家ヲ

夕ヨラス一旗ヲモツテ大勢催シ筑後表
へ出ルト聞エケレハ戸次伯耆守吉岡三
河守入道宗観彼是四人被遣龍造寺へ押
寄セ神崎姉サカイ原久知繩岳之陣ヲ取
略中軍ニテ日ヲ送り吉岡宗観隆信家人
古飯播磨八重犬塚カレウ三人隆信ヲウ
ラムル由アリト聞古飯播磨ヲ持コヘ吉
岡宗観于ヨク矢文ヲツカハス云々矢文

ハ古飯カ役所へ射ケルハイツハリニテ
ハアル間シキ折節夜廻リ表見付候へハ
コリシレ候へナト、云旗多隆信モサナ
カウ心元ナクア思ヒ給ヒケン降参ヲコ
ヒテ質人ニ龍造寺豊守ヲ出ス宗観ニテ
人召レ永録十二年三月廿日ニ豊別へ帰

陣也

柴田退治記云勝家不及力入天守呼雙年

三百九十一、十オ

來所頼股肱臣八十余人勝家運命明日相
究今夜及曙成酒宴遊興可惜餘波勝家取
盃一族一家次第々々酌流云々
松原自休于録云當家元祖德川次郎義季
之後亂世良田三郎滿氏輔佐義貞數度雖
有忠功新田一族於所々戰死義與義宗僅
催東勢武藏野雖戰專氏敗潛住德川郷云
云古

一族名字

叔井日記云粟田口族姓ノ夕ミカナラヌ
土民ナトノ數度ノ武辺ニ花實ヲ結ビ申
者アレハ食義アリテ被官衆ト申ニナリ
小身衆ノ一族名字ヲ讓ラレ候例ニ定マ
リ候ヘトモ一人侍分ナルニハ數度ノ武
辺ノ目錄ニテ組合ノ旗頭衆マテ達シ吟
味コトニシレク致シ定メラレ

出等所々被充行軍士之勲功賞云々又所
逃亡之佐竹家人十許輩出來之由風聞之
間令廣常義盛生虜皆被召出庭中若可掩
害心之族在其中否覽其顏色令度給之處
著紺直衣上下之男類垂面落淚之間令問
由緒給依思故佐竹事繼頭無所據之由申
之略中重尋其旨給申云閣平家追討之計被
亡御一族之條太不可也於國敵者天下勇

士可奉合一揆之力而被誅無誤一門者御
身之上雖敵仰誰人可被對治哉將又御子
孫守護可為向人哉此事詎可被廻御案如
當時者諸人只成怖畏不可有真實歸往之
志定亦可被貶謫於後代者歎之々々
太平記云足利殿御上洛條足利殿ハ反逆ノ企已
ハ心中之被思定テケレハ中々異儀ニ不
及不日ニ上洛可仕トソ被返答ケル略申長

寄入道圓喜性之思ヲ急キ相模入道ノ方
ニ參テ申ケルハ誠ニテ候哉覽足利殿ヨ
リ御臺君達マテ皆引具ニ進セテ御上各
候ナレ事ノ體怪ク存候如様ノ時ハ御一
門ノ疎カナラヌ人ニタニ御心被置候ヘ
シ云々

又云長寄意持明院殿ヨリ内々関東一御
使ヲ下サレ當今御謀叛ノ企近日事已ニ

急ナリ武家速ニ糾明ノ汝汰ナクハ天下
ノ乱近ニ有ヘシト仰ラレタリケレハ相
模入道ケニモト驚テ宗徒ノ一門先頭人
評定衆ヲ集メテ此事如何有ヘキト各所
存テ問ル

義久軍如信云是ハ左ヶ田少左郎海方ニ此
ノの志ぬのくふの怪人ト評定御同川上丸
迄この川北せふとすらあると名の星者

天下騷動大名等許各馳^集來云々殊判官入
道并九衛門佐入道^{將軍}一門^{守護}等稱身上事
用心云々

明德記云奥州紀伊國へ越テ舎元修理大
夫義政^理此合戦ヲ思立由申サレタリケ
レハ匠作^外以來^外之謀ノ宣ヒケルハ先上卜
對ニ申ヒテ弓ヲ引ヘキ奈返々モ不可然
略重紀伊國へ越^履々ノ事共ヲ申サレ同

心有ヘキ由勸メラレシカハ此上ハ割シ
申ニカナシ只一命ヲ面々ニ任ヒ申スニ
コソ侍卜宣ケレハ奥州^平ヲ開テ打掃リ
一門悉ク同心ニテ近日責上ラトノミ
汝汰シケル云々

大路軍記云抑信濃國小笠原信濃守長秀
遠祖長清祖又政長以來代々被補守舊職
不周茲長秀善由緒經許浪屬上哉然每相

遠則給安堵御下文應永七年七月二日給御
帳京部より立回在一日令下着信物古久郎
大升治部少輔光維依为一門先弛哉光雅
鑑被御教書令謹令一處成敗趣
二百七十ノ上ノ
應永記云管領ノ于二十余騎ニテ地ノ方
一ニノ本戸ヲ責破ル略山名古衛門佐入
道同民部少輔ヲ始トシテ一門五百余騎
管領ノ于ノ人與ヘテ散々ニ戦フ

^{嘉吉}嘉吉記云尊氏帝都之上ラセ玉フコレヨ
リ數十年ノ間度々ノ合戦赤松一家ノ者
殊ニ功アリケレハ範資ニ攝津國ヲ賜リ
光範マテ相續ス則祐又才智一門ニ勝ケ
レハ備前因幡兩國ヲ賜フ貞範ハ一門ノ
奉公惣領ナレハ播磨美作ヲ賜ル御教書
懇コアリ云々
應仁畧記云身をとり壽を保し一門繁

合者一門に侍りし者も其の事へも
補せり。一門の事此千尋の事と
外皆敗軍一軍と

^{四九}沙弥同然長杖云伊東攻市下向
於市一門も亦見方の信守符儀
日向相し誓紀前通と後藏し
湯河又明白なり

^{四五}荒木略記云荒木大將と神丹
丹波の彼多理

一。門より少壯は揚中
少壯はと申す少母は
中より

^{二〇}河州將府記云義祐世も
可首と此内なるは

門の事なり

里見義安多限限之高
右後向きと子と百と

佛一門の本原七郎

大友記（一〇七）云義鎮公御クシテ口サセタマヒ

宗麟公ト御名ヲカヘラレ候御一門先中

オモヒオモヒホツタイトナリ御煩ノ様

ナシトモ種々ノ御養生ニテ御本復アリ

存内へ帰り給フ

甲陽軍鑑云永保九年丙寅春信玄公大將

正内市時惠林寺長行（釋）寺を始各所故寺ニ

佛申も然す。息口も。此寺一遷す。之。正内

寺方。一。中。相。傳。一。少。宗。宗。唐。安。板。板。信。印。長。遠

寺。一。花。寺。思。田。見。柳。寺。迄。浦。菴。長。改。長。岡。以

上。檢。校。共。十。二。人。寺。此。の。社。を。一。道。逢。軒。典

既。勝。頼。公。穴。山。の。白。旗。の。一。寺。の。以。外。の。人

以上十二人は皆寺一門也

甲陽軍鑑未書云天正十年三月中旬信長

甲府へ御着春中ヨリ計策ノ廻文越給フ

武田家ノ侍大將衆皆御禮ヲ申セトアリ
テ觸ラレ、二月末三月初ニ信長又子越
シ給フ書状ニハカテ武田一門衆ヲ
初各引菴居給カ此筋ヲ聞御礼ニ出ル
甲乱記云 武田相模守 重而勝頼宣ケルハ
芳情ノ所ハ雖令悦一門一所ニ可落行事
ハ討畧ノ少キニ似タリ枉テ勝頼下知ニ
被任候一ト再三被仰ケル間信豊此上ハ

不及力免モ角モ可應下知之由有領掌上
信ノ人衆被召連佑又群ハ越給ケリ
奥羽永慶軍記云 高倉合戦田村勢敗軍條 清頭四本松
ヲ退治セシト軍慮ヲ運ニ給一トモ遺テ
最度者四本松被破陣無念タクヒヒナニ
サレハトテ其終行過之事モ云甲斐ナニ
是程ニ武運ノ盡ル事有ハカラスト一門
老臣ニ向テ内談セラルル其中ニ一門ノ棟

領夕リ之田村月齋入道前之出テ申様軍
ノ習縦十度二十度利ヲ失ノ事候トモ一
戰之得大利事漢楚ハケ年ノ戰ヒハ遠キ
事之テ候近代東國ニテイテ其例多候
又云田村取出滑津千石森清顯度々ノ戰
ニ失利免角三春ノ者共四本松ニ氣ヲ吞
シテ故臆スルト覺フタリ今度ニテイテ
ハ我自身馬ヲ出シ新城ヲ築キテ四本松

ノ坤ニセシト云僂ニ宗徒ノ一門先臣相
催シテ三千餘人千石森ト云所ニ出テ繩
張レテ先柵ヲ植サセ堀ヲ堀セヨト下知
シテ陣取シ處ニ大内備前守人数五々餘
人其間二里ヲ隔陣ヲ張テ足輕ヲ出シ鉄
砲ヲ打セタリ
豊後之平治ノ亦相國清盛信賴義朝を亡
と一ノ内あまの目を以て亦大改火局

子早もて

又之明智日向守之秀乃以濃尾土岐部四
とらふ里よ生も芳は土岐の一門と云りひ
しおんくありとて下郡の人とも持を

云々

松原自休牛録云岡崎落方此上一門頼候
清康ヲ婚こゝ岡崎可返云々一門老中更議
ノ彈正左衛門味方成候ハハ大幸也トテ

云々

又云清康揮成三州一圓馬之甲州信虎濃
州三人毛通使者向後可為一味云々尾州
森山内通一万餘騎岡崎打立一門家老為
魁兵陣岩崎云々

安土日記云天正八年五月五日御山ニテ
御相撲有之御一門之御衆御見物ナリ

一黨

太平記云四月三日ノ卯刻ニ又京へ押寄
セ夕リ其一方ニハ殿法印良忠中院定平
ト西大將トノ伊東松田傾宮弔田判官カ
一。黨元真木葛葉ノ溢レ者共ヲ加ヘテ其
勢都合三十余騎又一方ニハ赤松入道丹
心ヲ始トノ宇野柏原佐用真島得平夜直
菅家ノ一黨都合其勢三十五百餘騎云々
赤吉物徳之する祀よびましと書字の如きお

川多に大信をよぬよちうとらんかたはあつ
入道なちまきけるやういふ。一。黨連なる勢
我らとたりちれためふとるましと書字の如き事
いふもあしと書

伊^{六先ウ}連^建日記云大崎伊達ハ境論ニテ御中無
然候條政宗公へ申寄御加勢申請自家一
黨惣八郎打果シ長隆ニモ腹ヲ功セ可申
所存ニ候間云々

松原自休于録云曾追仕公望朝興歎朝變
暮化ノ謂乎家康怒之當從岡崎一里南上
和田安善ノ地也俄ニ擄取出大久保一黨
三十六騎被入置云々

一類

吾妻鏡云建保元年四月二日相州被拜領
和小平不亂長苙前屋地則分給于行新忠家之間
追出前給人和田左衛門尉義盛代官久野

谷弥次郎各所卜居也義盛雖含鬱會論勝
勇已如虎鼠仍再不能申子細云々先日相
卒一類參詐亂長事之時敢無恩許汝汰刺
緬縛其身渡一族之眼前被下判官浦行村稱失列
參之眉目自彼日急止出仕畢其後義盛給
伴屋地聊欲慰怨念之處不事問被替逆心
亦不止云々
又云治承四年十二月廿二日庚子石橋合

瀧ノ國々ノ城ヲ責ル由聞ヘケレハ鞆ノ
浦ヨリ左馬頭直義ヲ大將ニテ二十萬騎
ヲ差分テ徒路ヲ上セリ將軍ハ一族四
十餘人高家一黨五十餘人上牧ノ一類三
十餘人外様ノ大名百六十兵船七千五百
余艘ヲ漕雙テ海上ヲ上リケル云々
播州征伐記云山城變先約間諸平一統門
押入見欲討之取籠倉中引出懸火處打首

長治聞之元來覺悟之前我等一類ノ末期
此時也先置膝上三歳之緑子撫後髮一力
指胸下引寄女房同枕差殺絹引被置友之
女房如同生害長治友之兄弟于取于廣縁
為教盪一邊尤古直各呼出云々
明德記云去建武年中ノ大御所尊氏將軍
御代ヲ被召テ既ニ六十年ニ及テ一天下
恙武徳ニ帰ニ萬民皆具化ニ誘ル兵乱久

絶テ四海激浪治リ國民無事ニシテ
鳴狼煙立去ル處ニ明應二年辛未歲山名
陸奥守氏清同播磨守滿幸以下一類同志
シテ隱謀ノ企アルニ仍テ不慮ニ兵乱出
來テ都鄙暫不穩

江濃記云屋形次郎頼充公某年廿四歳ニ
テタケクイサム大將ナレハ勢ヲアツメ
一合戦ト志サシ爰カシヨコヒカエス

と勢ヲマケ給ヘ氏御運ノ末ニヤ美濃衆
悉ニ道三ニ隨ヒ普代善功ノ侍一人モナ
ク落行ケレハカナク神戸ノ渡リ迄落給
ヒ舟ノリ給ヘハ道三方追カケ奉リケ
レ氏舟ナクシテ川端ニテ各々音ヲアケ
アノ船頭ヨ其人ヲコキカヘサヌニナイ
テハ一類子矢皆々混料ニヲコナフヘシ
イカニ船頭コキカヘセコキカヘセト呼

リケレハ云々

愚年曰德記云 小南左近忠 右近中けるも

古思名の礼ふいなるは降参仕り申せし

可成近引辭あるに勢もらひ南近のまへ

集りし一由遠り給りし中申る

其才 伊達日記云其後伊場惣八郎ト申者近召

出カレ候に付刑部少輔恐怖ヲ持候親類

多者にて其一類恐怖仕候然間惣八郎存

候ハ我等一人モノニテ候間頼所世之由

存候而岩出山城主氏家輝正ト申モノヲ

力仕度由存輝正所へ存分之通申理に

付輝正合點引立へキ由誓約仕候云々

阿州将裔記云長治義賢嫡男也号三好彦

宗即勝瑞ノ孫也義賢討死之後阿州周

の太守と稱す心行不正し一統不仲し

ありして西の始より迄に合戦ありき

大正記云

明志孫平以故
中少之自害案

明志孫平以故

其時とつとけこれ多し。一類を其れけん

そくしんくくさうらりしん志あふんさるる

志あふんをあし教さうさるるあひうんさるる

あふん

又云柴田自
害案

天正十一年四月廿四日徳志孫

小あふんさるる柴田一類をいしくお果ありん

是をいすつてあふん徳志孫をいすつてあふん

人山城後よりあふんさるるいすつてあふん

比之柴田退治記云其外股肱臣八十余人或是

柴田退治記云其外股肱臣八十余人或是

違或自害天正十一年四月二十四日申起

楯籠北庄彼城柴田一類悉相果者也云々

又云小谷御方勝家雖為妻女將軍御一類

而所縁多殊更秀吉者至相公后孫憐愍無

不相親者明朝敵陣安内落給有何妨乎云

一味

江濃記云中頃藤原氏乃時六角の山名一味
京極方細川一味を以て古家石園一風味を
とあり互に據るとして江一樹を合し知
りせんとい

江^{世三才}北記云文明十八年十月二日從三雲降出
張石を以て達中古今意也此村を産す

治より其越所供仕對布意して上坂の松楸
知りはり也其下平野中所有を以て科所
御代爲藏に作付長享三年よりなり
知りはる也其時之由村の多聖大成一味
より穿人也

愚耳曰禮記云穀之精者新成尾崎の事人
一。味の志りて産す一城一城越の世皆ハ

沼才の増倍も有り

伊達日記云會津北方と柴野彈正ト申セ

ノ御一味仕候其外二三人モ同心衆候間

御出馬被成候ハと牛切可仕由申テ付テ

五月二日ニ丸馬助ヲ猿倉越ト申難所ヲ

越被遣候

天正記云信濃の道織田の三七のふり柴

田と流川と右流といふ者者より

を相渡すありと云ふ人ありと相違ひ

候しやのふり人ありと云ふ人もあり

御答一味曰くしは是をわいり候

牛尾甚だ衛門殿色利え就書之為は

味被執退に誠本望候就申牛尾ト多

進置に長久寺知行所安に仍し此件取

引年五月十一日牛尾宗也郎殿え就花押

洞

三百年上
伊達日記

伊達日記云ハ千ノ森相摸ト申者月舟伯
父ニテ候カ申候ハ上野殿ヲ始トシテ打
果方天ノ實否ヲ相付可然候大崎ハ洞一
品ニ候政宗公大身ニテ候間果シテ月舟
ノ身上相立ヘキニモ無之候

又云晴宗公輝宗公ニ代御父子御方天ニ
舟テ御洞別々ニ成御方天被成ニクニ候
又云備前被申上候ハ忝御意ニ候哉等親

代ヨリ御奉公仕候工トモ御洞御方天ニ
付テ田村ヲ頼入候處ニ少ノ儀ヲ以清顯
背御意ニ候其後會津佐竹ヲ頼入御介抱
ヲ以身上ヲ相續候云々

氏族

吾妻鏡云治承四年八月四日甲申散位平
兼隆者伊豆國流人也依父和泉守信兼之
訴配于當國山本郷漸歷年序之後假平相

國禪問之權輝威於郡御是本自依為平家
一流氏族也

五十三才

栲松湯云或ときふ所所命合在之律道是
故評定衆と跡多し一と市内傳親式力て定
らぬ方ともし將軍仰る^れにむしをさ
一頼朝の事年々同伊豆北條より辛
学一と善合^兵北遠道とてかへせしとて平
家曾行無道ホ一と善合也新^れの事年々

事一と善合人为了治承四年に善合を
昔一と善合之事に相敵と平十一と善合
合我々事年々一と善合道と相敵は善人
得る相一と善合の好善る成也善人
りしと高以得る^れに善合の事年々一と善合
氏族の輩以下疑々を拙^れる^れ事年々一と善合
きり^れ相^れ事年々一と善合^れ事年々一と善合
りし不便也

トノ氏族一牛ニ成テ二條大宮へ寄來間
數刻支テ責戰
又云抑此播磨守滿幸ト申ハ山名ノ左京
大夫時氏ニハ孫右衛門佐師義ノ末子也
舎兄讃岐守義幸病氣ノ後ハ彼代官トシ
テ在京之一方ノ家督トテ有ケルカ今度
宮内少輔時昭以下退治ノ後ハ四ヶ國ノ
守護職ヲ持テ權勢氏族ト越エタリ

家族

由良家傳紀云は家中は法度者ト申家族
并家老ト呼者ト此理トおのこい共以下等
トお果ト云とも片方斗を留トより成敗者
ト事

家門

三百九十一、三十五ウ
富樫記云恩ヲ得テ恩ヲ不觀ハ野鹿ノ草
ヲ踏菓ノ鳥ノ枝ヲ枯スニ不異萬丈ノ先

非天抛捨上和キ給ハハ下睦ニカウニト
申事草ヲ返スヨリ可速如此遂蓋相應セ
ハ積善ノ餘慶満家門榮花永ク子孫ニ傳
フ基タルヘシ云々

異制度訓律束之抑冬天之好帝遼走之象
向古芳象冷存ハ朝款而對治之大将出賜
之由承ハ先取之身帝初月及帝家門智昌
之世極ハ云々

關八洲古戦録云

上秋憲文武列
河越城貞條

左衛門大

夫綱成七歳ノ童兒トシテ孤タリシヲ象

人等介抱シテ小田原工立越辛キ月日リ

過ニケルカ漸ニ成長シテ氏紹是ヲ近臣

トセリシ竈愛亦類ナク竟ニ一方ノ部將

ト成テ駿豆相武ノ國境毎度一方ノ部將

ト成テ駿豆相武ノ國境毎度ノ合戦ニ于

並テ頭ニ寡ヲ以テ衆ヲ擊危キニ臨テ克

夕忍ノ忠義莫大ナリニ程ニ氏經家門ノ
席ニ列ニ氏康ノ妹ヲ以テ是ニ娶セラル
増補家忠日記云元龜元年八月廿八日大
神君遠洲濱松ノ城ニ於テ觀世宗雪入道
目元近太夫ヲ召テ終日猿樂有御家門ノ
整々近習外様ノ諸士城ニ登テ見物ス
家忠日記云天正六年正月十日信濃門
極御城ノ卜テ家康様遊遊被城ノ御門大

門客

吉妻鏡云治承四年九月九日戌午盛長自
千葉歸奉申云略其後有盃酒次當時御居
所非指要害地又非御晨跡速可令出相摸
國鎌倉給帝胤相卒門客等為御迎可參向
之由申也

久米田軍記云江州動佐々木ノ家老ヲハ
目賀田次郎元衛門檜崎太郎元衛門尉三

上孫三郎三雲新左衛門蒲生下野守等也
其外兩門客トテ兩家アリ佐々木刑部大
夫ト田中四郎兵衛後号治此兩家一族ニ
テ種類繁多ナリ其外ニ京極朽木鞆智大
原トテ一門アリ此等ハ皆京都工直參ナ
レハ各別ノ事也

門武家名目抄稿第十冊

明治十六年二月

校 岡田太郎吉





明治十六年二月

日

岡田水滸吉

